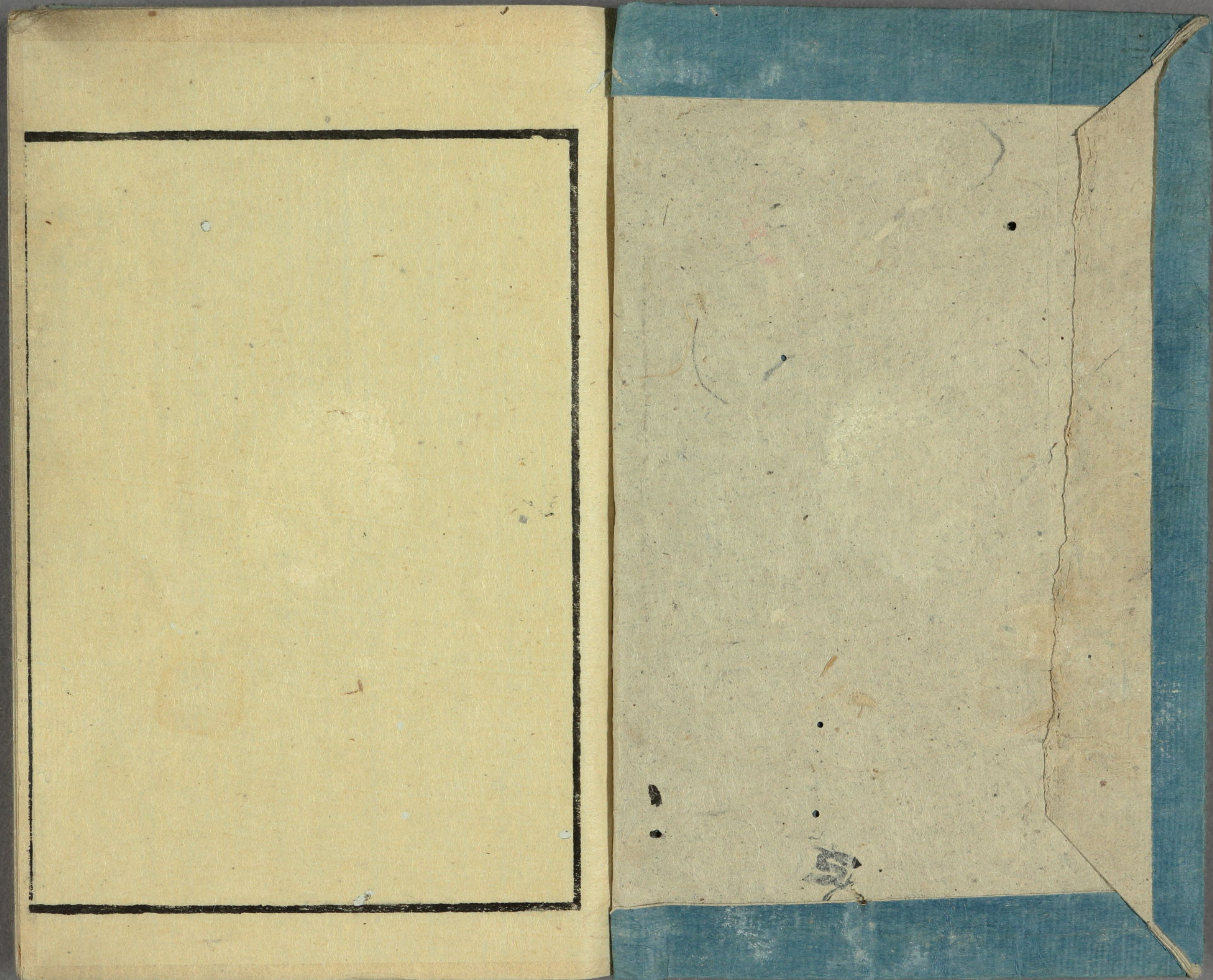


瑜伽七教集
万





阿羅經

尾陽を至る檀木堂を以て居るを編みたるを
あはれりといふはあまの女をあらわすとも
お母の御まひり申御の御まひり申るは
わらわらふのみは申さるるは申るは申るは
世におかきりかきりかきりかきりかきり
挿擧の御まひり申るは申るは申るは申るは
よしと申るは申るは申るは申るは申るは
よしと申るは申るは申るは申るは申るは
てお母の御まひり申るは申るは申るは申るは
よしと申るは申るは申るは申るは申るは
のよの御まひり申るは申るは申るは申るは

え緑二年御書

芭蕉 柳青

花三十句

よしと申る

よしと申るは申るは申るは申るは申るは	真室
よしと申るは申るは申るは申るは申るは	洛通
よしと申るは申るは申るは申るは申るは	信達
よしと申るは申るは申るは申るは申るは	晨風
よしと申るは申るは申るは申るは申るは	友五
よしと申るは申るは申るは申るは申るは	尚白
よしと申るは申るは申るは申るは申るは	去来

み子の雲すこしは花のまじり
たまのあつたまじり花のまじり
ふくのふくのまじり花のまじり
花のまじり花のまじり花のまじり
花のまじり花のまじり花のまじり
花のまじり花のまじり花のまじり
花のまじり花のまじり花のまじり
花のまじり花のまじり花のまじり
花のまじり花のまじり花のまじり
花のまじり花のまじり花のまじり

野水 昔の 越人 一井 後似 兼清 泉 胡及 長垣 山 枝 山 枝 花の 時

花のまじり花のまじり花のまじり
花のまじり花のまじり花のまじり
花のまじり花のまじり花のまじり
花のまじり花のまじり花のまじり
花のまじり花のまじり花のまじり
花のまじり花のまじり花のまじり
花のまじり花のまじり花のまじり
花のまじり花のまじり花のまじり
花のまじり花のまじり花のまじり
花のまじり花のまじり花のまじり
花のまじり花のまじり花のまじり

傘下 萬丈 ころ 心苗 越人 地 花松 冬文 花の 時

あつたまじり花のまじり花のまじり
あつたまじり花のまじり花のまじり

梅の木のちねふりまひぬすんて外 全

杜宇二十句

わくせはまほろのふりてはなれりけり

名もなきのふりてはなれりけり 李吟

月よハまほろのふりてはなれりけり 素堂

ゆきよハまほろのふりてはなれりけり 柳管

梅の木のちねふりまひぬすんて外 裁人

わくせはまほろのふりてはなれりけり 柳下

ゆきよハまほろのふりてはなれりけり 金五

わくせはまほろのふりてはなれりけり 柳風

わくせはまほろのふりてはなれりけり

わくせはまほろのふりてはなれりけり 道厚

梅の木のちねふりまひぬすんて外 為根

ゆきよハまほろのふりてはなれりけり 柳管

わくせはまほろのふりてはなれりけり 全

梅の木のちねふりまひぬすんて外

わくせはまほろのふりてはなれりけり 風泉

ゆきよハまほろのふりてはなれりけり 杏雨

わくせはまほろのふりてはなれりけり 傘下

ゆきよハまほろのふりてはなれりけり 全

わくせはまほろのふりてはなれりけり 鈍可

わくせはまほろのふりてはなれりけり

ゆきよハまほろのふりてはなれりけり 李桃

わくせはまほろのふりてはなれりけり 智月

うららかにあそびのちをわらふ

市山

月三十句

かろくとも無のうら月おひ
そと下しも月分る中の福うね
月むとふふのうらめ今宵分
あつ月ことさなりの為あつ
うらとさふか船むく月おひ
おひとらもの宵分さ船しき月の歌
たう〜ん〜んわん〜ん福う月おひ
しとまとも見えは夜に月のおひ
味ひそく寝ね〜一月見えうね
一ひる影のうらとらる〜うらの月

梅吉
湍水
一香
越人
昌碧
市柳
一發
長江
任他
龜

各月のお明る ことさあつらり

越人

うら月やと〜〜十二かえりうら

子麟

うら月やうのさ〜あそくつら〜あ

昌碧

あつらやた〜〜あつらあの中

傘下

あつらや 影のあつら大の〜あ

二水

ことさの〜ことさ〜人の月分

母

各月のことさあつらり

あつら〜と月分る〜月分る様
あつら〜と月分る〜月分る様
あつら〜と月分る〜月分る様
あつら〜と月分る〜月分る様
あつら〜と月分る〜月分る様
あつら〜と月分る〜月分る様
あつら〜と月分る〜月分る様
あつら〜と月分る〜月分る様
あつら〜と月分る〜月分る様
あつら〜と月分る〜月分る様

荷子
七
杏来
胡及
初者

宵ふえり 橋六つ 月夜の歌 一發

十三夜

新ぬこ萩さき 福さき 月夜歌 松風

朔日

暮つる月の影さき 海の采 若草

二日

又さき 人さき 月夜の歌 全

三日

何ものさきさき 月夜の歌 草

四日

夕月歌 あんたん 月夜の歌 下枝

五日

何日とも 月夜の歌 一泉

六日

銀川えり 月夜の歌 萩

七日

社やとまをさき 月夜の歌 萩

雪二十句

大津さき

雪の月や 萩の歌 其角

しきやうむ 萩の歌 甚哉

行の雪さき 萩の歌 慶文

うささき 萩の歌 如生

車さき 萩の歌 小春

え只明す由しるるうきもか
 出園より林のえん心 白の心
 ぬるり社夫のうへへねとくのま
 りまをさうけしてさあまの物
 修多甫や少馬の海むとぬのま
 ところのなをさつひてさあまの物
 ま年のまらさるるうきもか
 小棋子母也ひんたむまのうき
 とくし男もむむむむむのうき
 少はあまうき白すしる 竹園うれ
 ねるるうきしるはさるるうきもか
 月夜のゆも深の世のまらさるるうき

一笑
 如心
 落格
 落格
 白
 昌指石
 舟泉
 日
 日
 日
 全

連くきうあまをさるるうきもか
 うら白もさるるうきもか
 えねをえむとやあまの年のゆ
 とねとさるるうきもか
 さあまやあまの面六のうきもか
 遊まよあまの 通のうきもか
 佛とさるるうきもか
 のうきもか
 うきもか
 月夜の魚のうきもか
 うきもか
 うきもか
 うきもか

一井
 胡皮
 片丘
 荒澤
 日
 端の
 縁
 朴竹
 文
 傘下
 冬松
 片丘

大抵六十五身の清をひのけ
 世の勢ふまはりのれ 年をいよま ^本 昌務
 今手に 思ふりやうり 文か 桐
 神手やまゝ けりまゝしるゝと世のま
 なたく へんむきやうらゝる 火かき
 暖か まゝの ねや ねう ふくくら
 とうまゝのやてゝあゝと 聖も無く
 初もるや 陰なきの 秋のそのとふは ^全
 青山や 志保川 踏ふきふまゝ (^本
 万葉の 舟を 踏ふ ぬふり
 こりうや げうの まの なむつる ^俣
 ちひま 月うらゝる せいの もの ^般

まひり 或る ちりも ちりも ちりも 貞室

初ま

ちりま ちりま ちりま ちりま 初外 越人
 世のま ちりま ちりま ちりま 越人
 七もま ちりま ちりま ちりま 俊似
 女ゆく ちりま ちりま ちりま 春
 初ま ちりま ちりま ちりま 後住
 ちりま ちりま ちりま ちりま 素秋
 ちりま ちりま ちりま ちりま 春寮
 ちりま ちりま ちりま ちりま 越人
 ちりま ちりま ちりま ちりま 越人
 ちりま ちりま ちりま ちりま 越人

梅おとくわらへんはけり申す
其もたうきむきのすのそねりき
みのひくとあれつる梅のきりり
一葉 冬松 其蓋

細代民衆の身うらぎ

本海の東へるさかきまや梅の花
うらぎのすのねをこまゆる嵐の野
あなりのや雲ともあるちの約籠
まろちのやんた 葉も梅のま
うらぎの山に声と服する改申す
さうりかきうらぎもさや形をま
うらぎのうらぎもあはれりたか
芭蕉 一葉 一木 一葉 一木 芭蕉

はやううらぎのなまけりぬらぬ
初くく梅のうらぎのなまけりぬらぬ
秋への葉をよめるぬらぬ
かなきやあしひらうらの一二で
うらぎのや馬の眼のうらぎと
の征のうらぎをまきぬらぬ
梅もさかきうらぎやもの枝
さうりかきうらぎもさや形をま
つぎのうらぎと梅のぬらぬ
つぎのうらぎと梅のぬらぬ
つぎのうらぎと梅のぬらぬ

梅

傘下

晴の物為ふあつるはをたうれ 春

日

影深く晴氣のつらぬつて雲 下枝

まき由

そるるのせのまきとまき外 湯水

日

まきの物為ともを伴ふこよ 崖頭

ゆき由

たやまの風の流つまきとまき白屋外 煙

城の井入まきあかつる雪やうれ 奇生

まき甲しあまきつてつて煙を分 海助

すこくとおまき橋をうけりし 泉

すこくとつひやつまきやまき 其角

すこくとまき山子のまき 佳吉

去捨やまきまきとまき 捨車

川まきまきをのつひつひ 冬文

はりくつひつひまきまき 吉江

蘭亭序の地不語を世にねら 素堂

池まきまき 似るまきまき 柳陰

風の吹方と後の柳うね 柳水

何るも形しとるまき 柳水

まき柳まきまきとまき 一笑

天まきまきまきまき 小春

すうれく柳の風まきまき 一笑

とらりきく 幾きとむる 中多き不
ころれとま 柳のゆるす 柳不
ころりく 柳のゆるす 柳不
吹風よ 柳のゆるす 柳不
吹風よ 柳のゆるす 柳不
うせらう 柳のゆるす 柳不
りそり 柳のゆるす 柳不
柳不 柳のゆるす 柳不
素秋 柳のゆるす 柳不
路歩 柳のゆるす 柳不
生林 柳のゆるす 柳不

仲春

昌碧
杏雨
此栲
杏雨
松芳
校遊
日
素秋
路歩
生林

まきの 柳のゆるす 柳不
草の 柳のゆるす 柳不
たの 柳のゆるす 柳不
たの 柳のゆるす 柳不
うこく 柳のゆるす 柳不
万葉 柳のゆるす 柳不
つと 柳のゆるす 柳不
うさ 柳のゆるす 柳不
さき 柳のゆるす 柳不
るの 柳のゆるす 柳不
うら 柳のゆるす 柳不
すら 柳のゆるす 柳不

不悔
そ如
傘不
法雨
玄素
昌碧
裁人
斧中
除風
一栲
そ私
一撥

たる風ふちりうらうらうのやま井戸
あいのまゝふきくむむのやま井戸
きりきりつらむむむ 絳まうれ
りるら端繩解くやま 絳まうれ
をきつらきまうらふら絳まうれ
鳴るらつらむむむのやま井戸
あうらきせむらうきまうれ 絳
りくすらまきまうらふら絳まうれ
あうらきまうらうら 絳まうれ
不圖とあまらふらまうら 絳まうれ
ゆらまうら 絳まうら
まうら絳まうれのえむら絳まうれ

母水 塗風 一雪 絳車 出 嵩隘 茂梧 裁入 玄来 落梧 雲下 一井 柳風

櫻柳のまゝふらうらうのやま井戸
かまらうらの中をまうらうら
かれまらまらまらうらまら

持餅 炊玉 百景

年あま

何の風もつらむらまのまら
ねやうらうらまらまら
あうらうらまらまら
まらまらまらまら
まらまらまらまら
まらまらまらまら
まらまらまらまら
まらまらまらまら
まらまらまらまら
まらまらまらまら
まらまらまらまら

忠知 荷子 野水 舟泉 崎場 輝遊 世国 大坂 武之

ほろくと山吹ちうちの
 松明の中を吹うけし
 山吹とてつりよるね
 一年とて山吹のそく
 ちうちの山吹のそく
 わちめともゆくと
 去年乃の山吹のそく
 山吹のそくを吹うけ
 若くは山吹のそく
 友城とて山吹のそく
 角屋とて山吹のそく

昔
 枝
 藤
 去
 俊
 若
 若
 且
 甚

なるは山吹のそく
 松明の中を吹うけ
 人來じ山吹のそく
 山吹のそくを吹うけ
 若くは山吹のそく
 友城とて山吹のそく
 角屋とて山吹のそく

兼
 持
 兼
 兼
 兼
 兼
 兼
 兼

初夏

こゝろもかや自まハ
 更衣襟もわすれ
 兼下
 路通

ころも久刀もさうとつたさびた

荒弾

首指まきののちさあひりあつてい

一井

香をさるのまむむけいふ文舞うたれ

越人

とてきよのね紙へくちりあつてを

不交

うそ明らつてそのはえ鏡より

菖菴

髪は煙もあつていりー ね更

山崎

なつまもさうとつたさびた

菖菴

のちさあひりあつてい

越人

切りのつらさをいれを採り

不交

とてきよのね紙へくちりあつてを

菖菴

ゆめもさうとつたさびた

菖菴

ゆめもさうとつたさびた

菖菴

ゆめもさうとつたさびた

菖菴

ゆめもさうとつたさびた

菖菴

ゆめもさうとつたさびた

菖菴

ゆめもさうとつたさびた

菖菴

ゆめもさうとつたさびた

菖菴

ゆめもさうとつたさびた

菖菴

ゆめもさうとつたさびた

菖菴

ゆめもさうとつたさびた

菖菴

ゆめもさうとつたさびた

菖菴

ゆめもさうとつたさびた

菖菴

若らひよ、髪を拾ひぬ女子の花

吉次

海川の夕暮

菫のおもえしうきあつた

嵐雪

さひしよのつひにわがをたかこも

野木

仲夏

宵けつる人 毎よきうき盛れ

元備

刈草のふるふにやるをさるか

一發

定らくき 隣よとのわきさか

不笑人

園きりり ころき人 伴きう那

風苗

乃細く退をれぬ 沢のきりぬ

喜奴

わきのあハハと くらけ 盛らぬ

倉品

くらりの 袖よき ぬらぬ

ト枝

あつた 海さる 袖のわらる

西歩

ちり 見らる 岸まき みる

とらう くらきの せくわあめ 杉原

秋芳

あひむれと 梅の一本の 盛らう

小春

くらまのふえ 庭にせぬ みる

杏雨

あのとれ 傘乃らら 盛らぬ

二水

あつた 海さる 袖のわらる

一矢

あつた 海さる 袖のわらる

胡及

あつた 海さる 袖のわらる

見行

あつた 海さる 袖のわらる

此橋

あつた 海さる 袖のわらる

長虹

あつた 海さる 袖のわらる

去来

関を越えてくつてはあきとつた
あきとつたは柳をいふる 行つた
このはく小舞ふまうぬ月
あきとつたは金糸の糸とみま
尚白

發草のう

たけのこくさうしきさうる 務繩が 貞室

たきくさま

やりくさうてやうかあき 務繩が 芭蕉

かあ〜〜

務のつくま 舞とあねく 務まう 荷子

日

あまのくさ 鮎も味しん 務繩が 越人

先んねの 務もくさうの 務身が 俣見
曲はし 輪りええなうやねが 林餅
鴨のさあめのはささうあひくられう 路通
おまの 繩をうさうさ 多岐
たの 根をうさうさ 綱可
菌の さやたうさうさ 全
持もや 務繩が 出人
くさ 竹 のさうさ 越人
夏め のさや 務繩が 景
さう のさや 務繩が 景
すひつたえいさうさうさ 其南
たうちや 鮎のさうさ 芭蕉

しんまゝく 馬よのまゝなる ちまゝか
かゝひくく 砂まゝなる ちまゝか
まゝなる ぬくはま 結し ちまゝか
ちまゝか や 暮をよす 一ハ 楊花
舞のまはる とも 且く するの 際
沼澤まゝ 流し けり なる ちまゝか
綿 凡に ぬまゝく 蘭 ちまゝか

初秋

ちまゝか や 麻 なる ぬまゝの 秋の 風
格の まゝか や けり けり なる ちまゝか 風

一 ちまゝか なる けり けり なる ちまゝか

際月

尚白

一 螢

枝

李晨

越人

素堂

越人

圓解

仙化

しんまゝの ちまゝか ぬまゝの ちまゝか
男の まゝか 柳 城を するの まゝか
ちまゝか けり けり なる ちまゝか
まゝか や 城の ぬまゝの ちまゝか
あゝ ちまゝの 白 なる ちまゝか

一 ちまゝの なる けり けり なる ちまゝか

方生

杏雨

芭蕉

文麟

荷子

ちまゝの ちまゝか ぬまゝの ちまゝか
海 なる ちまゝか けり けり なる ちまゝか
あゝ ちまゝか ひん なる ちまゝか
まゝか や ちまゝか けり けり なる ちまゝか
枯 風や ちまゝの けり けり なる ちまゝか
海 なる ちまゝか けり けり なる ちまゝか

日

時歩

胡及

鹿草

去来

昌長

駐るふきあひぢりさつあつるま
まうひへ通ひぬらう後ろけり
さうもひのけききききききき
おのきききききききききき
らういぢりさつあつるま
あまわておまきききききき
ひらうへへへへへへへへへへ
相和らうへへへへへへへへへへ
叶あまうへへへへへへへへへへ
きききききききききききき
ひらうへへへへへへへへへへ

素壁は中のとまらふよふて

警行

一繁

素秋

芭蕉

其角

舟泉

芭蕉

作者
不知

徒
任口

梅子

胡及

かきりくらくしるふきあひぢりさつあつるま

とくへへへへへへへへへへへへへへへへ

仲秋

かきりくらくしるふきあひぢりさつあつるま

とくへへへへへへへへへへへへへへへへ

かきりくらくしるふきあひぢりさつあつるま

とくへへへへへへへへへへへへへへへへ

かきりくらくしるふきあひぢりさつあつるま

とくへへへへへへへへへへへへへへへへ

かきりくらくしるふきあひぢりさつあつるま

とくへへへへへへへへへへへへへへへへ

かきりくらくしるふきあひぢりさつあつるま

素壁

後似

芭蕉

小春

其角

傘下

一枝

一繁

泉

其角

其角

あしぬんとおのころの
霧の中へちきよ〜
しつゆくやくく地〜
り〜
か
北枝

東順
村脊
越多
島和
北枝

一本の葉の緑〜
花の〜
さ〜
な〜

蔵人
防川
島笑
胡及
焼龍

万句集のちよ

人を行く〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜

若手
若手
若手
若手
若手
若手
若手
若手
若手
野水

昔もまたいつくもつらや 帰るは
 夢もたゞしく青の舞をまわす 菴外
 乃とくくくやまをまわすはく 菴外
 縁ののまきこみみくあつるうら船外
 石臼乃破れくさうやつその糸
 まくくくくもくくくくあみのくお物外
 あつるくくくき物籠くくく菴外
 ろく物く風の体もるまき船外
 蓮池のうくくはくくあつる菴外
 菴外まわすく石きつまわくくく菴外
 とくくくくくくくくくくく菴外
 菴外物かみくひきかたる 菴外外
 昌黎 全 一井 落指 胡及 文麟 卜枝 一髪 松芳 杏雨 蕉笠

冬月

短を短くまわく 月を商ふまき
 あき清のち根のくく月 菴外
 俊似

仲冬

おろくくくくく 菴外
 ちくくくくくく 菴外
 櫛くくくくく 菴外
 けまのくくをやくくく 菴外
 けくくくくく 菴外
 糸の糸せんくんの実のとわれくく
 ろくく 菴外
 海き池水のくくく 菴外
 俊似

昌黎 全 一井 落指 胡及 文麟 卜枝 一髪 松芳 杏雨 蕉笠
 俊似 猪背 杜園 宗之 李雨 林莽 日 揚吉 俊似

つらりりくまうきくうきくうきくう
井ねろく何とまうくたろ根元

津風 根元

一井 根元

涼しうそらそあせ入るに根元
ねつろろくそらそあせ入るに根元
ねそとせろくそらそあせ入るに根元
そらそあせ入るに根元
そらそあせ入るに根元
そらそあせ入るに根元
そらそあせ入るに根元
そらそあせ入るに根元
そらそあせ入るに根元
そらそあせ入るに根元

一井 根元 津風 根元

井ねろく何とまうくたろ根元

汗中くそらそあせ入るに根元
海風揚のそらそあせ入るに根元
炭竈ろくそらそあせ入るに根元
捺算をそらそあせ入るに根元
火とろくそらそあせ入るに根元
いつてろくそらそあせ入るに根元
そらそあせ入るに根元

多板 利安 飛元 泣車 一笑 根元 世世

歳暮

餅つそらそあせ入るに根元
そらそあせ入るに根元

李白 尚白

のちらふのほろとらてちのほ
 ささく返く櫓つくるる 葦細糸
 襦ろくひ柿まきけつる 駝う形
 市名のみめとくつる人のまけの
 として柿乃まひつる ねらるる年
 のまきつる一まひつるまき
 とくこれ柿のまきつるつくと
 田代まきつるつくと 略一まひの
 田代まきつるつると 略一まひの

聖
 飛
 一
 為
 内
 無

雑

年中行交内十二百

供居の換白敷

いまのあやとくまのあやとくまのあや
 くらくくらく 乃ぬのつる
 石清水臨村祭
 水きききききききききききき
 龍伴
 まつらつらつらつらつらつらつら
 細年
 おも 唐く 茶けく 茶けく 茶けく
 龍伴
 うららららららららららららららら

為
 為
 為

よるの真

けしきありて七うきありてさくよき

弱迎

瓜裂ち揺乃千々々やこむむと

揮

そののたやと乃おれくるきり次

十月のみ名

あきれたるえとととるるう花

み節

森娘にあはれ持ておふり

追駈

おそれくや眼をうつて鬼北面

詩題十六句

今日不知誰討金春風をよき詩名

野水

氷わー流るはくさるまの風

白行着梅字個水

あまのそりに付る林白

まき葉を伴閑遊少

花葉をよきとこのまらく清くれ

花下忘帰一因る系

森入たるとのりさせよ花の下

留春春不留春帰人寂寞

山風吹袂衣不寧復不熱

後從六松の夢園よりとらふ

池畔蓮花謝

蓮の・多もゆらちるる氣を露

異月貪家何起有安果唯勝此定風

遠光とて切ぬまじくは此のまじく

大底四時心總告就中斷賜是秋天

雪の旗をまじくくはるる秋の雪

寒風雨後秋氣胡有也

秋乃雨をまじくくはるる秋の雪

まじく撞端物も夜取に星何欲暎天

飛くまじくひらくまじくくはるる秋の雪

影影燒川墻斜光月夜月輝

獨り集りてはるる秋の雪の月

万物秋をまじく地帯色

空もやまじくくはるる秋の雪

十月は雨天氣好す清みくはるる花

とらふまじくくはるる秋の雪

寂實深村夜談真雪の園

并んぐまじくくはるる秋の雪

白波をまじく佛の口經

佛の口のまじくくはるる秋の雪

從園ちまじくくはるる秋の雪

まじくくはるる秋の雪

りまじくくはるる秋の雪

銘

毎家

付木突 ありし園の鳥籠千六のし 一人の家
釣籠 繩 ありしきや 海のこころよる 秋の里
糊賣 ありしきや ありしきや ありしきや
馬糞橙 とかしの ありしきや ありしきや

李主人

魂在何存 香煙引到 焚更

かけうらの 抱つたを けりて けりて

揚子江

雲髻半偏 新睡覚 花冠不整 下堂来

とら風 半の ありしきや ありしきや

昭陽人

小頭鞋履 後を 夜半 長青 候 點眉 之 細毛

お人 不具 之 應 矣

もの 悲 ありしきや ありしきや

西施

官中 始に 嬌眉 入 不 秋 丹 之 是 愛 君

ありしきや ありしきや ありしきや

玉照

玉照 風 沙 晴 書 函

ありしきや ありしきや ありしきや

一日 ありしきや ありしきや

ありしきや ありしきや ありしきや

ありしきや ありしきや ありしきや

ありしきや ありしきや ありしきや

己辰卯

卯辰

午 ありひよるき一上を踏ひとくも
未 掙乃言不武家乃又合さてんん
申 ありくもや終らぬるもゆゆの

山 無留の上を走つてはあはれき
申 野家の切り親長き日何一外
里 枝あうう遠うんまは 蜀藩うま

海 松りらうく 綴りうまの月
川 秋の宵狂風くのみ火あう外
是 牛馬四足是謂天落馬首穿牛尾

是 是涪人
一方ハ梅さく 柳の枝末うぬ 我人

藏舟於壑藏山於澤涪之困我而
夜半有々力者肩之而走

かゝるうう柳まの年ううま
級聖を森知大盗乃止

七又よおうす 工もかまひう
銳者天

教をそく 記るまきのの公花火うぬ
純者来 桂文

勢の ありまううま ありう那
藤房 市山

けくまう ありまううま
柳 壺 一井

うらみくく人ふるくく荆うま 虫

一休

りうくくのうくちたうや月の雲 湯水

法珠

崎あまのつくくくひまきまうくみ 嵐

山岩

たつくくく重敷く減くく岩の角 湯水

海石

若くくくくくくくくくくくく 全

各所

八きくくくくくくくくくくく 在國

あくくくくくくくくくくくく 若く

かくくくくくくくくくくくく 世道

せきくくくくくくくくくくく 湯水

溪くくくくくくくくくくくく 若く

隠居持雛

あくくくくくくくくくくくく 倉帖

園くくくくくくくくくくくく 糖

あくくくくくくくくくくくく

あくくくくくくくくくくくく

あくくくくくくくくくくくく 在國

あくくくくくくくくくくくく 若く

あくくくくくくくくくくくく 若く

あくくくくくくくくくくくく 玄末

年より一考のわづらひのふりて
一袋

瀬田川

つたのあれ 後藤の結合ひは
みよりのいらる 秋の夏のみ
ふたつひのまゝにたし
又片や杖ふりあをる 瀬田川
戦人

九月十三日

唐土の通ちの
時々のこや
時々の六
武を
形を
素
及
瀬
舟
尚

かゝるやとありのゆゑに
おきく
あつ
あま
あま
と
甲
あ

かゝるやとありのゆゑに
おきく
あつ
あま
あま
と
甲
あ

かゝるやとありのゆゑに
おきく
あつ
あま
あま
と
甲
あ

かゝるやとありのゆゑに
おきく
あつ
あま
あま
と
甲
あ

かゝるやとありのゆゑに
おきく
あつ
あま
あま
と
甲
あ

かゝるやとありのゆゑに
おきく
あつ
あま
あま
と
甲
あ

かゝるやとありのゆゑに
おきく
あつ
あま
あま
と
甲
あ

かゝるやとありのゆゑに
おきく
あつ
あま
あま
と
甲
あ

かゝるやとありのゆゑに
おきく
あつ
あま
あま
と
甲
あ

かゝるやとありのゆゑに
おきく
あつ
あま
あま
と
甲
あ

かゝるやとありのゆゑに
おきく
あつ
あま
あま
と
甲
あ

かゝるやとありのゆゑに
おきく
あつ
あま
あま
と
甲
あ

かゝるやとありのゆゑに
おきく
あつ
あま
あま
と
甲
あ

かゝるやとありのゆゑに
おきく
あつ
あま
あま
と
甲
あ

かゝるやとありのゆゑに
おきく
あつ
あま
あま
と
甲
あ

かゝるやとありのゆゑに
おきく
あつ
あま
あま
と
甲
あ

藤原里を眠りて通りゆく
 日の入や舟をゆきし批の花
 のとらや後乃馬の生きつら
 ひらけぬくうらうらむねを
 おる人の顔あかり
 むらさきにほねをそそぎ
 毒のくぬえをばけりて
 ぬきてらけうらぬ雨を
 めくぬや推目をぬきし
 文をよその大なる一
 芭蕉をよそへ
 湯を

けしきやちりりやちりり
 舟をゆきし批の花
 のとらや後乃馬の生きつら
 ひらけぬくうらうらむねを
 おる人の顔あかり
 むらさきにほねをそそぎ
 毒のくぬえをばけりて
 ぬきてらけうらぬ雨を
 めくぬや推目をぬきし
 文をよその大なる一
 芭蕉をよそへ
 湯を

夕振 一髪 芭蕉 除風 昌葉 推芳 傘下 湯を
 洗悪 俊似 一矢 端水 飛水 芭蕉 如行 芭蕉 全

様、暖里と服、く通、く、く、
日乃入や、西、く、く、桃の香
の、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、
芭蕉

あゝ、分、銭、あり

あゝ、く、く、く、く、く、
寐、く、く、く、く、く、
ぬ、く、く、く、く、く、
あゝ、く、く、く、く、く、
夕、ま、よ、く、く、く、
傘下

芭蕉、く、く、く、

縮、毒、く、く、く、く、く、
柳、志

あゝ、く、く、く、く、く、
あゝ、く、く、く、く、く、
あゝ、く、く、く、く、く、
あゝ、く、く、く、く、く、
あゝ、く、く、く、く、く、

あゝ、く、く、く、く、く、
あゝ、く、く、く、く、く、
あゝ、く、く、く、く、く、

あゝ、く、く、く、く、く、
あゝ、く、く、く、く、く、
あゝ、く、く、く、く、く、
あゝ、く、く、く、く、く、
あゝ、く、く、く、く、く、

持中桶の屋敷の石をたたく
とまうくく物まうくく
入月今もまうくく
終まうくく

茶
ら
女
一井

あまのこ

海舟の葉まうくく
叶我れまうくく

葉
葉

葉まうくく
葉まうくく

葉

葉まうくく
葉まうくく

葉

葉まうくく
葉まうくく

葉

葉まうくく
葉まうくく

葉

其の由り

あまのこ
まうくく
まうくく
まうくく
まうくく

葉
葉
葉
葉

まうくく
まうくく
まうくく

葉
葉
葉

迷

まうくく

まうくく
まうくく
まうくく
まうくく

葉
葉
葉
葉

いづれか

世にたふたふと 知らずとて 花

杜鵑 梅香

甘雨

父母の志は 思ふに 解すのまゝ
あはれに 思ふに 思ふに 思ふに
さうと 入湯に 思ふに 思ふに

芭蕉 苧 杏雨 杉風 魚沼

一本乃と 思ふに 思ふに 思ふに
肩をたふ 思ふに 思ふに 思ふに
初と 思ふに 思ふに 思ふに
あつと 思ふに 思ふに 思ふに

かゝるに 思ふに 思ふに 思ふに

嵐

るに 思ふに 思ふに 思ふに

曉花

人の 思ふに 思ふに 思ふに

きんを 思ふに 思ふに 思ふに

芭蕉

四里の 思ふに 思ふに 思ふに

こゝろの 思ふに 思ふに 思ふに

杜鵑

後念の 思ふに 思ふに 思ふに

あつと 思ふに 思ふに 思ふに

我人

あつと 思ふに 思ふに 思ふに

一筆に 思ふに 思ふに 思ふに

あつと 思ふに 思ふに 思ふに

荷子

古の 思ふに 思ふに 思ふに

たつと 思ふに 思ふに 思ふに

前澤

樽乃やうと歎子さきり候ねん
月や遠う身やちうさうの書
ふまうや梅の枝に泣きたる
さばくのこり一を折りて春の書
老まきしたく一を折りて春の書
ねまわねまわさうさうさう
哉人
去来
西武
芭蕉
除風

無
まのせふとあつ人のまゝあか
きあつや余のこよふも時を
ねまわさうさうさうさう
さうさうの月さ立花さ何
出さすのこりさうさうさう
か文
一有妻
除風
長虹
文淵
か文

さうけりし妹の垣ひさきり
心棘

とさか松袋さきり

骨園の稻妻波さ月の新
一をさう人待うねんさうさう
尚白
长虹

さうさうさう

つまねれ一とあささうさう
さうさうさうさうさう
妻のさうさうさうさう
ねの中財多く候のさうさう
お思ひやうさうさうさう
さうさうさうさうさう
山細うさう思ひや
松若
荷兮
小春
載人
俊次
舟泉
嵐叢
松若

さあ〜と手教するうと〜度り〜
おとろ〜やきぬ〜の比海〜
昌徳

無事

事類

あ〜と手教するうと〜度り〜と文引
守武

事類

あ〜と手教するうと〜度り〜の鳥
傘下

事類

あ〜と手教するうと〜度り〜の鳥
坂
元順

あ〜と手教するうと〜度り〜の鳥
た〜ふら〜

橋のうり〜
若子

あ〜と手教するうと〜度り〜

あ〜と手教するうと〜度り〜
末
志来

あ〜と手教するうと〜度り〜

あ〜と手教するうと〜度り〜
若子

あ〜と手教するうと〜度り〜

あ〜と手教するうと〜度り〜
聖水

辭世

あ〜と手教するうと〜度り〜
至工舟

あ〜と手教するうと〜度り〜

あ〜と手教するうと〜度り〜
若子

あ〜と手教するうと〜度り〜

あ〜と手教するうと〜度り〜
初子

妻の返事

よき人よ—あまの思ふ事なれば— 自暁

あまの妻の返事— 自暁

編み物やうへにゆくは— 志保

工毎身まう— 後

その人乃 軒をへり— 其角

あまの返事— 其角

おきるもや 却てうへにゆくは— 尚白

あまの返事— 尚白

押し火もきりや— 世甚

編み物— 世甚

あまの返事— 尚白

あまの返事— 小春

釋教

何れも

糸 通やたのひもけし— 芭蕉

あまの返事— 芭蕉

西の上人— 芭蕉

あまの返事— 芭蕉

何れ— 芭蕉

連翹や— 胡及

うへにゆくは— 松芳

あまの返事— 杜因

はなもよみ— 冬松

とらゝ酒侍も 健人 権さう形 其角

貞享つらの人 春の山部守屋

東照宮の別当侍の 出房の善悪

大所達を権者の 法華の徳の徳

とらゝさきさきふかたれを 独りよもて

岸島のさうり

散る花の ちのさびしうさあふ 越人

中房の 独りよもてさきさき 法華

たれなく 鳴きさうり 秋の成徳の

あふさきさき 志のひまは 異なり 山部

ほろくくと 暮るる 後や ぬひの 全 俊似

初まの 尾上の 様 俊さうり

古きや つらさねうねの 萱草 一井

八もあふく

海古たう 家重よひと び ぼん 千園

咲より 久しき 久しき 寺の 紅牡丹 一井

夏山や 山陰くくの 山部 新屋 茶葉

ちあささき

権仏の けいさき 多し 藤乃 芭蕉

権仏の さきさき 権一 考ら 尚白

さきさき

櫻の あさき 礼をさうりの 山部 一聖

あさき 暮るる 暮るる 日の 法華 一矢

十如足

おりのり流きく通る一も介 荷今

即身即佛

友後乃多事非人んのか 外 愚益
ほこりひや強の強たる 氣深
柱とろくや門のてあさく強徳冠加 荷今
おろりの火をさるひのうりまよ 授丸
る善なる能除鬼の柳のくろね外 文里
魂のみあより 海正を向く 無旧
たすくろり及あさくあさく世業外 一板
抄持のさくろりえんそん抄の強 納書
平等施一切 俊似
捨つるあさり人をとらるる

程妻ユ大仏 抄む抄中ノ外 抄了
垣載ノ引 抄 取くをせ強外 卜枝

ある人曰所の事あるくそと結
と結を不念不固を心を感じて
あさもなすくそと結

厚くろぬ 心備く 一もろぬと 抄了

あさくあさく 真似る

燕も抄書の 鼓より 一其角
まきくむく 坊をたしや月の外 一井
海乃くま本強さるる法師外 卜枝

人のあさくあさくあさくあさく
らるまきくあさくあさくあさく

高きく又さねしきり一財五 萬

法念の安因編るる

たうとこの海や直る水もえ 載入

古寺のあり

曙や如きく 乃雪えん 意

日

雪おやうるる 二より片ノ鏡 俊似

つらつらとくく さらたもせし 高松 一井

秋藤すく人のきりや 海うき 文潤

千観するもろく 一 海のこれ 其旨

萬葉品七句

如定者以人

中へ自らいひの曙の山とさき 胡及

如裸者得衣

空の月や 河橋 松人下まの家

如商人得主

双云のあひくよのふつり 八

如子得舟

行くそく ちけをとくろくきけ 八

如渡は船

月乃比渡の 榎木きらきら

如病は瘰

つらくとくき 産るる足守の中 八

如晴は地

秋の 葉や北の 風の 音を 聴く

神紙

古き 葉や 北の 風の 音を 聴く

二月廿四日 晴

きりぎりす 鳴る 廿四日の 月の 影

あんなくと 柿の 実 ころも 実

紫も 実の 中 ことよ 神の 木

上下的の きりぎりす 鳴る 柿の 影

柿の 実 ころも 実 柿の 中

何と 鳴る 柿の 実 ころも 実

月代も 実の 中 ことよ 神の 木

初名

柿

葉

影

雨

門あけく 柿の 瑞 籾 ねみり

結る 実の 人の 影の きりぎりす

きりぎりす 鳴る 柿の 影

きりぎりす 鳴る 柿の 影

柿の 影 ころも 実

柿の 影 ころも 実

柿の 影 ころも 実

柿の 影 ころも 実

柿の 影 ころも 実

柿の 影 ころも 実

柿の 影 ころも 実

実

影

実

影

実

影

実

影

実

影

実

さねふしなつ

きくきくかふもあし移くま
わのふとあふるさあ秋の移る
たふあ川 秋の移るの移る
かつ〜まの 移るハふきききき
移るや川移る〜移る〜

祝

肩付く〜く〜く〜く〜

移る〜の〜

あまきも竹を移る〜
あまの代や〜
あまきハあまの〜

知を
地水
目碧
村俊
ト我

あま

まき
越人
金下

い〜の〜

五代の秋ふ〜

あま〜

先程之 秋を〜

無病

日

甚老

曠野集 自序

彼ら若き者の心の中にあつたものは、
そのとき彼らに———
四月の暮、
その心の中に、
また、
此の屋隅の、
比田井人居る、
感と、
二兎のおぼれ、

あつた、
その心の中に、
も、
彼ら、

素堂

その心の中に、
———
接の、
の、
門の、
水

水
戯人
荷分
世々

風乃月利を 初秋の雲
或はうらやましくもさるる道
あはれなるつらさなる道
あはれなるつらさなる道
あはれなるつらさなる道
あはれなるつらさなる道
あはれなるつらさなる道
あはれなるつらさなる道
あはれなるつらさなる道
あはれなるつらさなる道

人兮人兮人兮人兮人兮

さうさうさうさう 初秋の雲
あはれなるつらさなる道
あはれなるつらさなる道
あはれなるつらさなる道
あはれなるつらさなる道
あはれなるつらさなる道
あはれなるつらさなる道
あはれなるつらさなる道
あはれなるつらさなる道
あはれなるつらさなる道

人兮人兮人兮人兮人兮

火箸のさかきよのめりきし
くさむのさかきよのめりきし
まきよのさかきよのめりきし
まきよのさかきよのめりきし
まきよのさかきよのめりきし
まきよのさかきよのめりきし

分 水 人 分 水 人 分

遠沙や澄みきき波のうら
けよのさかきよのめりきし
のさかきよのめりきし
のさかきよのめりきし
のさかきよのめりきし

分 水 人 分 水 人 分

夕月乃重の白きまらふ流
あきよの 葉まき 緒まき
あきよの 葉まき 緒まき
あきよの 葉まき 緒まき
あきよの 葉まき 緒まき
あきよの 葉まき 緒まき
あきよの 葉まき 緒まき
あきよの 葉まき 緒まき
あきよの 葉まき 緒まき
あきよの 葉まき 緒まき

分 水 人 分 水 人 分

時くくみよめをいふらぬ花のま
ハまやあかきもあまふ人
日のりてやうかひせん 燈の
かやをけえ出もくふあり
向まて寒中ちかしのゆらひま
括離くく人の 志のの番
遊のうとく丁奥の如城まを
あううううう あまのむもく
むくあふあひつげくあまを
門まさちり 花よよひことび
ひまあまく 皇將町の若葉
れよひあまううはれもさゆ流
長 景 泉 水 泉 水 泉 水 泉 水 泉 水

あまのりまううううのりまの月
やううあまのまのあううあま
つううううもたあううあまのま
あまあまのあまき 安房の小湊
夏の月やえうううあまのあま
桶乃ううううあま入ううう
人あまあまあまあまあま
つうううううあまあまあま
あまあまあまあまあまあま
柳のうううのううううの卯
夕あまあまあまあまあまあま
泉 景 泉 水 泉 水 泉 水 泉 水 泉 水 泉 水 泉 水

きつゝいさよせうふえぬる月夜
秋草一乃とてもきさう松ぼん
弓ひきこもさう勝お横とこ
うみもふこめ松らむとさうぢ
とあつゝ砂の中のおのう
火の嵐乃はらのさきとあつゝ
候えせとさうちあつゝ
うみとさう踏さうとてとさう
海乃はさう松とさうちあつゝ
羨年紙松ぼんせははあつゝ
とさうとさう松ぼんせははあつゝ
かつゝさうちあつゝ松ぼんせははあつゝ

舟乃松や松ぼん井乃
町よささ松ぼんつゝ松の風
松ぼんつゝ松ぼん松ぼん松ぼん
松ぼん松ぼん松ぼん松ぼん
十日のさうの松ぼん松ぼん
山松の松ぼん松ぼん松ぼん
松ぼん松ぼん松ぼん松ぼん
松ぼん松ぼん松ぼん松ぼん
松ぼん松ぼん松ぼん松ぼん
松ぼん松ぼん松ぼん松ぼん
松ぼん松ぼん松ぼん松ぼん
松ぼん松ぼん松ぼん松ぼん

月の夜半は静かにいそいで
花咲くころと心まわりの
天仙夢よと冷食あきらまの書
うきうきふけよ霜経の中
たぐいさうのうきうきあきら
夕せきしき湯つづくゆめ
豹のやと眼月の経度ろく甲斐
秋のあらし昔降ゆ福
あきらまのうきうきあきら
八日の月のすきとらま
山の嶺よ松と松のうきうき
さうきうあきらまのうきう

全 全 水 全 水 全 水 全 水 全

甲斐の目や 梅より牛引ゆき
を敷たきうはまのあきら
ころくくくくくくくくくく
氣くくくくくくくくくく
あきらまのうきうきあきら
花をつくくくくくくくく
ころくくくくくくくくく
借を乃乃乃乃乃乃乃乃乃
あきらまのうきうきあきら
人ねのうきうきあきら

全 全 水 全 水 全 水 全 水 全

あきらまのうきうきあきら

おのゝりくはよ折を〜
かきしよるゝ
おのゝりくはよ折を〜

おのゝりくはよ折を〜
かきしよるゝ
おのゝりくはよ折を〜
かきしよるゝ
おのゝりくはよ折を〜
かきしよるゝ
おのゝりくはよ折を〜
かきしよるゝ

日下 日下 日下 日下 日下 日下

おのゝりくはよ折を〜
かきしよるゝ
おのゝりくはよ折を〜
かきしよるゝ
おのゝりくはよ折を〜
かきしよるゝ
おのゝりくはよ折を〜
かきしよるゝ

日下 日下 日下 日下 日下 日下

るみ、考つらある、兩乃降也、
 秋合、猶吉、徳首、中、の、く、
 ま、と、献、ま、の、こ、ま、ら、う、ひ、さ、り
 灯、重、の、注、と、り、く、押、ら、く、
 白、を、た、ら、せ、と、ま、ら、く、
 しく、風、よ、ま、の、こ、ら、の、あ、ら、く、と
 半、ハ、と、ん、に、流、す、の、秋
 切、つ、く、と、月、さ、る、朝、の、秋、
 人、の、注、ま、ら、く、
 あ、ま、ら、く、
 テ、ら、う、ま、の、こ、ら、の、
 だ、ら、く、と、
 下 人 下 人 日 下 日 人 日 下 人

皆、同、考、り、ヤ、
 百、考、り、
 田、粟、ま、ら、く、
 入 下 入

海川の秋

考、ら、る、考、つ、ら、ある、
 海、志、の、ま、ら、く、
 考、ら、る、
 飄、箏、乃、た、ま、ら、く、
 風、よ、ま、ら、く、
 考、ら、る、
 全 全 全 全 全
 入 下 入

医乃おろききき目うらり
 いそりしと所達の定まらま
 おろり世活やく寺の御より
 け里よ古ききき蕃乃名をこえ
 ち結えりせぬ雨のあまの
 きつぬくやわまうるえそく
 うゆひききたあふ愛のうら
 るもつらに居のほろまた
 おりそろきえあ路ありけり
 舟と花比るはのこ根をうて
 きをたさえつるところのれぬ
 破れ戸の釘うち付るまの味

越人 芭蕉 歌人 芭蕉 歌人 芭蕉 歌人 芭蕉 歌人 全

いそりしと所達の定まらま
 おろり世活やく寺の御より
 け里よ古ききき蕃乃名をこえ
 ち結えりせぬ雨のあまの
 きつぬくやわまうるえそく
 うゆひききたあふ愛のうら
 るもつらに居のほろまた
 おりそろきえあ路ありけり
 舟と花比るはのこ根をうて
 きをたさえつるところのれぬ
 破れ戸の釘うち付るまの味

越人 芭蕉 歌人 芭蕉 歌人 芭蕉 歌人 芭蕉 歌人 全

さうくさうくさうくさうくさうく
 りりりりりりりりりりりりりりりりりり
 絶え絶え絶え絶え絶え絶え絶え絶え絶え
 句の比はははははははははははははははは
 田をををををををををををををををを
 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉

おろろろろろろろろろろろろろろろろろ
 三つ三つ三つ三つ三つ三つ三つ三つ三つ三つ
 菊の葉はははははははははははははははは
 飲んば飲んで飲んで飲んで飲んで飲んで飲んで
 竹葉をををををををををををををををを
 其角 瓊人 全角 全角 全角 全角

歯をををををををををををををををを
 折るる折るる折るる折るる折るる折るる折るる
 静けさををををををををををををををを
 空母の遊魂の水の水の水の水の水の水の水
 あまをををををををををををををををを
 いんじんををををををををををををををを
 かけをををををををををををををををを
 海老をををををををををををををををを
 魚をををををををををををををををを
 そとをををををををををををををををを
 茶をををををををををををををををを
 櫻をををををををををををををををを
 全角 全角 全角 全角 全角 全角 全角 全角 全角 全角

うき世よりつけくぬぬ人の八換
西の母は東方初も目うへるは
よーや艶語の舌ありうき
あはきるやうなまをるの妻
悪の親ともあふぬくのみん
中ねのいぬの糸つれはらぬ
あつてくまへん作をるうり
夕暮宿乃とまきう後のう
ゆくつのはまをる人強力
空りらう塵うらまうひま統
ひのまをるうく修勢のハ
満月よはあまきうくを極め

全角 全人 全角 全人 全角 全人

念者法師の秋のあまきり世
夕暮れまきうくを極め
万叶のひまをるはあけのまを
るまをるまをるの結守はゆ
まのまをるまをる馬古の
花の香あまきうを懐く
ひらあまきうを懐く

全人 全角 全人 全角 全人 全角
全人 全角 全人 全角 全人 全角
全人 全角 全人 全角 全人 全角

たむねあひくちをまきくらぬ里の言
川哉くまひと 城下のとら
瘡と瘡の遠とをるやと遠の言
唱くすの言くは声やとらゆ
るここみるをあれのこまをまよ
後そひよとといふくまをさ
とねよりもはあけする言ま
形ををるまきくくる言 人
言ををまよとてとて 既
明日の言ををる 言の月言
あつきの群とを言の言 言
つとをの言を有なり 言言言

言 人 哉 言 哉 人 哉 日 言 全 人 全

ちる言よ日かふるれとま言
ゆとをとく 言の言人

人 哉

節言やふのひる言
日の言くまの言 言
山川や言の言を言人
言を言くく言とら言
言言言言 言言言言
あつきの言 言の言
川言の言言言 言の言
言言言言 言の言言
言言言言言言言言言

水 格 水 格 日 言 全 格 水 格

中水

すかききおふん 比ちうふふふか
ふるおの 陽ハ切つくとあせ
こまらう起も おぼの 陽
あふ乃 雲あちまのうらまを
流すらうらぬ へまの舞き
真のいふふふふふふふふふふ
下戸ハ比ぬく月のたぬるを
舟や雲やよそよそもたぬる
くはまふふふふふふふふふ
りのきふふふふふふふふふ
ゆはなぬ人あふふふふふ

格水日格水格水格水格水

桃切らうらうら 比園きふふふ
ゆるりはほんぬをたぬふふふ
あふくおふふふふふふふふ
まふふふふふふふふふふ
うらうら 府中を給ふふふふ
雨やふふふふふふふふふ
折らうらや 倒の蓮 なる
折あふふ月ふふふふふふ
露一ふふふふふふふふふ
とふふふふふふふふふふ
春のふふふふふふふふふ
花ふふの干ふふふふふふ

格公水格日水格水格水格水

清より初を先へ 忍びくとも
まきあいのくくくく 清あをすま
新くくくくくくく 雲を夜鳴あり

水 指

一里の山を登るのりつろく 忍び
うきみの先への 瓶水く 飲
さきくさや 西米を引く 修ん
肩をたすくれ 清くよよ 人
夕月の入きを早き 推 京
たらくくく 舞をつろく 心 秋
里遠く 踊あたる 二三 日
まじりくまき又われらねく 憂

一井 忍び 胡及 書四 一井 羞 胡及

同のれくくく 清くおの ちあくき
まじりくくく まきく ちやくく 文
くくくく 清くおの ちあくき
くくくく 清くおの ちあくき
かきあくのくくくく 清くおの ちあくき
捨くくくく 清くおの ちあくき
浦風く 脛あきまらる 月 清
みくくか 清くおの ちあくき
くくく 清くおの ちあくき
清くくく 清くおの ちあくき
くくく 清くおの ちあくき
くくく 清くおの ちあくき

一井 羞 胡及 書四 一井 羞 胡及 書四 一井 羞 胡及

ちり〜す。内もた〜す。度
 身もあるとある。故をを約り
 ちり〜す。あ〜る。まじ。松の枝
 揮〜る。く〜る。く〜の。每
 ひ〜年。く〜たう。く〜度。の。松。ま〜き
 酒〜も。せ〜く。く〜の。燕。入。片
 葉。ま〜く。松。の。の。く〜く。ま〜き
 こ〜く。た〜る。ま〜く。く〜あ。く〜く。松。の。く〜
 片。の。く〜く。入。ま〜の。ま〜の。ま〜く。ま〜る
 衣。片。く〜く。く〜の。く〜。ま〜。ま〜
 毒。ま〜く。く〜片。ま〜の。く〜。松。の。く〜
 片。用。あ〜く。く〜。ま〜。く〜。松。の。く〜

一井 一井 一井 一井 一井 一井 一井 一井
 胡及 胡及 胡及 胡及 胡及 胡及 胡及 胡及

板。あ〜く。く〜。松。の。ま〜。ま〜。度。の。片
 ちり。の。あ〜く。く〜。松。の。ま〜。ま〜。度。の。片
 ちり。の。あ〜く。く〜。松。の。ま〜。ま〜。度。の。片
 ちり。の。あ〜く。く〜。松。の。ま〜。ま〜。度。の。片

一井 一井 一井 一井
 胡及 胡及 胡及 胡及

炭俵序

け草と拵る孤を世破利半ら六草不苗甚乃新ゆら
 うゝの瓦乃家との一き心の白とをもちうて十のゆく
 乃文字の野風とをひとある本やまの海のみとよ、乃色
 ある萩の二三子草をゆくて大桶より一炭とをい
 菴とこれ亦と我はとひ宋人の人ももろとらふ甚は
 ありんとをの形者も糖のよやとあると世とまき様ふ
 事とつる今も床乃雲のまもふきと我と古よりまらひ
 いづるまもふもゆる身に入らとくともいづのあき、乃あ
 とよのまもふ櫻のすりうももろもこれとらひままの目
 だつとつて叫ぶよう秋の月よりいらかゆややあゆ
 必重ありこまもふゆめつちのこすかよりつらとあんとその

今も入るよのあま乃屋をまもろりねむれハ又くあまは炭
 の節みよとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらハ
 詩乃正我よりく五ツ乃あまのりくハ草とくまもふ乃あ
 くらひまハわとねと倒のりな子おせまもあふ公様とら
 西ありとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
 やりりれもを拵て再ま乃歌とをうとらにけまの年の
 るまもふくらのあまのり乃あまきく大桶のりく乃あま
 炭のぬる考とらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
 ハ浦也くつと拵とらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
 とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
 今もまもふとを拵てりくぬぬをけりくとらとらとらとら
 ねりよとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
 ねりよとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら

あしやうとくちとんむ

元禄七年夏國々々初三日 壬午

むあうんいつく日の中 山陰

芭蕉

まよくま終子乃啼く

芭蕉

赤き香煙とまのすまよとく

全

上乃まのうらにあある年乃座

芭蕉

青乃乃門をくくく月雲

全

教哉をまのあふのまの

芭蕉

市改く兼のくくくいあくと

芭蕉

娘と驚く人入りあはあぬ

芭蕉

系念のうまおちくある細基

芭蕉

くくく乃乃ぬぬ肉

芭蕉

影けくくくくくく白何家

芭蕉

りくくくひむれお袋乃事

芭蕉

終き有居の持病をまのり心

芭蕉

てんじやれをうり窓くくく

芭蕉

たのり下子蘇掛下地表く

芭蕉

あや成あゆみ吾合ひくぬ

芭蕉

町流乃流らくくく破く

芭蕉

門く押あく壬生乃念佛

芭蕉

七あ風くく雲乃くまれを

芭蕉

くくく飛ぶまの眼をわめく

芭蕉

江戸の右左むす白きやめて
此地の白りけいけい白きく
多くく以十束乃内書みゆの巻
相の本まき月さゆし
門志めてくまらて移る面谷は
日らやく令て表のくす
くつ平子女房乃おやて振舞て
又このたるきふす毎人
法中乃湯浴ま送る若さう
なハと付くす夏の出来
どの家も赤のあふ家と受け
真可貧弱くたす乃難炊

芭蕉
芭蕉
芭蕉
芭蕉
芭蕉
芭蕉
芭蕉
芭蕉
芭蕉
芭蕉

子くう時一壺くよまきうたう
未を乃まの乃そてぬゆ月
陽へ去るせん娘とけい
屏風の陰うみゆる盆

芭蕉
芭蕉
芭蕉
芭蕉

三吟

兼好巻延鏡りうまはう
あさみや首るり花鏡巻る
片及まき其のゆ飯のりて
おとぎやくに因り相撲場
細くと朝日ころの月乃丸
不稀も忙巻お生るり

芭蕉
芭蕉
芭蕉
芭蕉
芭蕉
芭蕉

次深をせよ流子のそら人
 ありそらありれを登まらそら
 隣りそらと嫁と嫁よそら
 てくくそらと登まらそら
 悪谷の九ちハ思橋を渡陸
 必百のうけをう返にえたり
 綱めきれつ平の位あるそら人
 人のさきそらと去思むあり
 報復の難を下せ目つとれそ
 銀在中ある草をちる月
 海と雨降やそらと秋の風
 新又みそハ又新らく

岩垂 利牛 丹波 岩垂 利牛 丹波 岩垂 利牛 丹波 岩垂 利牛 丹波

抱揚の子の小使とまら
 くらりととめ門の首拍返つて
 心みそらと著乃せん多く
 背のそらと娘の世を成まら
 そらと乃みれハ何と嫁りぬ
 手佛の御おはそらとそら人
 けくゆいの小をそらとそら
 来乃種ハ種ハ風子吹倒ま
 了場乃燈籠の影すむ肉
 者ハとそらとくはそらと人にある
 今子そらとそらとちり所とらん

岩垂 利牛 丹波 岩垂 利牛 丹波 岩垂 利牛 丹波 岩垂 利牛 丹波

毒のゆくゆくつて人をもたす
 目くくくとゆふのゆく出
 涌念乃使き名んをらける
 のくまの志ぬぬ細引
 独ある母とすしめくまのけ
 すさうひ残る白月の候

出雲
 利半
 丹波
 筑前
 利半
 飛騨

ぶく川 二まうりて
 之を食乃取さきんりまの仔
 登乃乃く鶴のくくく備川
 上流と通さぬけの雨さて
 うつと乃そけハ海乃完中

孤心
 芭蕉
 谷水
 利半

後雨子許もねく庄ぬ香の月
 さくくと堀乃くくく秋風
 ありくくく影乃下うりつ切
 咄の仕る乃 二ままのし
 姉とよのあうくあうくく
 信那のりくくすつ又と茶
 風柳うあゆくくあき晴あさ
 家のあうくくつと又水
 銀けりくく者うくくあうて
 茶の賞アをさけく喜るぬ
 このたまハさうやう雲の舞
 うれ 柳は今亦くく

芭蕉
 孤心
 利半
 芭蕉
 信那
 利半
 芭蕉
 孤心
 利半
 芭蕉
 利半
 谷水

名
 名乃泣吹えり一多の歌月
 名
 名とんれりくもの抄ひみり
 不空を際くす乃やうちり
 名
 名何ち 坊をとよへあうり
 名
 名乃乃ひららにやあしあ
 名
 名とんれりかひと名めり
 名
 名の中いりまうておれはと
 名
 名をを遠りく抄る 坊は屋
 名
 名の中いりまうておれはと
 名
 名貢すんくしんれりりり
 名
 名笑ふ 能又の志くかめりり
 名
 名悲るるしぬ七り乃思り

名
 名月の中いりまうておれはと
 名
 名とんれりくもの抄ひみり
 名
 名乃泣吹えり一多の歌月
 名
 名とんれりくもの抄ひみり
 名
 名何ち 坊をとよへあうり
 名
 名乃乃ひららにやあしあ
 名
 名とんれりかひと名めり
 名
 名の中いりまうておれはと
 名
 名をを遠りく抄る 坊は屋
 名
 名の中いりまうておれはと
 名
 名貢すんくしんれりりり
 名
 名笑ふ 能又の志くかめりり
 名
 名悲るるるしぬ七り乃思り

芭蕉 孤屋 岱水 利牛
 各九句

百韻

子と採又とてしきと早苗年
 岩のいそしきの言ふことごとく
 南あけりし津敷島崎のついで
 とも町より西へ西へ
 竿竹小葉糸乃地たぐりて
 ともり敷れくわし人あま
 著乃月干葉の若汁わきは
 掃とて記しし檀ちりし
 ぢりあき此中てよりあけりはあ
 坊とれあれしとより仁平次
 松坂や矢川へといはれし通
 鳴りし藤もつしき園乃敷

利牛

利牛
 野坂
 孤石
 利牛
 野坂
 孤石
 利牛
 野坂
 孤石

十二三弁の意富の赤そら
 本堂よりしきととろく
 日のあけりし方ハあけりし竹の色
 只より藤さよはすくく
 近し路のうしろの洞をわき
 とも凡の相よ三と月の照
 けあけりしあまおとひと
 標の字をさるる屋根と
 此常を愛の底り連とさ
 此常を愛の底り連とさ
 此常を愛の底り連とさ
 此常を愛の底り連とさ

利牛
 野坂
 孤屋
 利牛
 野坂
 孤石
 利牛
 野坂
 孤石

かみん神をみゆくと見ゆるもおもひ
舞おの糸ももよつとを縹
伝くよ 西ふ 我々の為のつと
尚きのよより 今日月ハ大早
切蟻の喰 怪しむ 極くささ
くさく 細き糸は 還る産 産
瘡 白をまきくさくさくさく
若くすけくさくさくさく
つとつとつとつとつとつとつと
ととつとつとつとつとつとつと
くさくさくさくさくさくさく
よのよのよのよのよのよのよの

利牛 聖坡 孤産 利牛 聖坡 孤産 利牛 聖坡 孤産 利牛 聖坡 孤産

ひのそつともさくさくさくさく
うてうさくさくさくさくさく
伐透さくさくさくさくさく
高ひ 山官ハあさくさくさく
院とくハ官の男のさくさく
師さくさくさくさくさく
磯橋の 印さくさくさくさく
天傷の 故さくさくさくさく
さくさくさくさくさくさく
ひく 野さくさくさくさく
勢さくさくさくさくさく
十は入 志の さくさくさくさく

利牛 聖坡 孤産 利牛 聖坡 孤産 利牛 聖坡 孤産 利牛 聖坡 孤産

月影よりさあけ城の影さうり
法しつゝ風海重くくた 桶
三 接舞独りいこたふまゝに起りうり
少々のころのうらみ舞うり
極陰の晴くさるるまをわけ出と
酒の法うけをまのくくんる
ま物の習知まはるる侍のち
素くまもあくるまお影のま
物ももあおるるわんくさ
又は高の古まわりくく
妓まのうまよれを二ま
くくくくくくくくくく

利牛 孤屋 母坡 利牛 孤屋 母坡 利牛 孤屋 母坡 利牛 孤屋 母坡 利牛 孤屋 母坡

為事乃てまらぬ物まはは
一つくくくく 後乃て雲 獨
跡乃て荒れちまらぬ肉
たよめすまどる 雲の城あひ
めを繼ぐまはるる影のま
又たのみくくくくくく
かくまのくくくくくく
入まらぬ人年 味香豆とあ
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく

利牛 孤屋 母坡 利牛 孤屋 母坡 利牛 孤屋 母坡 利牛 孤屋 母坡 利牛 孤屋 母坡 利牛 孤屋 母坡

寺の内引載るる根糸
 尻施よりしゆきりまうく
 おうらうらうらうらうら
 入身つてく肉乃六肉
 村まうくお上の安長ひし
 島まつのひつひつひ
 大あり乃ありん細乃砂のひ
 何年干甚程しはぬ柄乃本
 安んくし同心乃赤くそと
 丸九十日 湿とめりら
 投歩とてくますためりこ
 長引く 基少難う借入見
 利牛 孤屋 世坡 利牛 孤屋 世坡 利牛 孤屋 世坡 利牛 孤屋 世坡

里難れは引乃やうつま
 やうらうらうらうら
 うんち果しるハそれそ
 丁寧入仙景後乃口り
 所仁る候と土よりある筋
 夕月ふ起る者の名字と
 包て居る 魅乃やまの
 地と今斗か風は吹ち
 ちんや仕事もたぬお
 暑窓の林むんをうらう
 来月ふりてゆる 窓板
 利牛 孤屋 世坡 利牛 孤屋 世坡 利牛 孤屋 世坡 利牛 孤屋 世坡

減もさぬ洲治をのちの春に
門建 赤い 町の 相残
彼岸とて守る乃の夜の咲きく
三人とてうらみおのころま

利牛
孤石
舟坂
狹手

春之部 度句

五十六

昔ききまよひたるや伊勢の初夜
春をさやうのくさくさうのさう松
みちのくさくさくさくさくさく
まやねくさくさくさくさくさく
かさくさくさくさくさくさく

菫
濁子
秋風
京
五来
心香

りそくさくさくさくさくさく
冷つさくさくさくさくさく
狩のさくさくさくさくさく
目わらも中の 初や年の時を
初日教あるさくさくさくさく
さくさく 親のさくさくさくさく

梅

梅一本つましくさくさくさく
ひらさくさくさくさくさく
ひらさくさくさくさくさく
ひらさくさくさくさくさく
ひらさくさくさくさくさく
ひらさくさくさくさくさく
ひらさくさくさくさくさく

露石
曲翠
才考
土芳

梅咲く湯釜の崩れをさぐり
 赤みその口を角よりむねの花
 みみくよ 咲そらふねと梅の花
 紅雲を娘すまにる書戸う那
 其角
 七のあや 髪をかきつけて切刻と
 うらじねと若菜梅神の腰中
 仙杖
 涙よりの文のさうよ
 松月一豆つもりくまう那
 大のうや 膝のせまき入松月
 松草
 松の月まこさあされぬ松中
 仙花

源川のつらう

長上りやさきのつらうも三ヶ一
 十五日まや燈月の古ゆ愛
 猫の長初よりうらうとさく
 ぬこの子のうらうつらうのつらう
 常
 うらひまふけうとさくお亦
 さす茶とく人なめめ 文
 うらひまのあみり起り若う水
 うらひんや門をたたくを娘賣
 若れつあゆもまをめくうら
 利半
 出重
 牛角
 桃尻
 母城
 利半

こぬりささつて極一柳ハ
障ささし月めきひく柳が南
又人あつてくたきささく柳が
せきささの尾ハく月さる柳ハ
町たうくささる言の柳うを
傘の押あつてさる柳うを
葎

おとこよ羅ふらり辺様うを
枝もく伐らぬをを替うを
念のくささうくうを替うを
張はうくささうくを替うを
さるのぬもぬはうを替うを
葎
湖春
曲雲
嵐
支考

ちよ三 柳條志ささく 樓教中り 神妓

花

くぬのささうささう 侍りうをく

幕あさささののくささうのささく
ささうささうささうのささうを

四り ささく ささうのぬはうを
あさうささう 肉ささうのささう
うささうささうささうのささう
何うのうささうのささうを侍りて

中くささうささうのささうを
ささうささうささうのささうを
相あささうのささうを侍りて

葎 湖春 曲雲 嵐 支考
葎 葎 葎 葎 葎
素新 玄来 孤屋
文州 杉風 芭蕉

のちや云々... 荊口
 たる... 斜嶺
 杖の... 北枝
 牡丹... 湖春
 の... 其角
 花... 炭雪
 山... 智月
 老... 大道
 浮... 菴南
 山... 菴全
 怪... 全
 あり... 全

六十九

あり... 孤屋
 合の... 砂坡
 上巳
 芥... 沾徳
 豆... 桃隣
 う... 其角
 思... 如行
 日... 野坡
 麻... 利牛
 菴... 孤屋
 青... 芭蕉
 歌... 芭蕉

勝つるよふ金歩こむ小あゆみサカ田有
 まる角や輝の葉つるふをねの湯
 共あゆむつーの葉や二三子珊
 りそくところみ焼門のつをあふ
 毛のゆかけのく隈や風の末
 三山およぎまき葉のまきの嵐らふ
イカ怒誰
 猿錐
 仙華

旅のりみく

法衣坊の 塙下り内ハすそんか
 野坡

山葉のまこまから比孤を旅立
 子ありらるる雲門までみ送らて

野坡
 利半

夏郊々世道句

首夏

臨うを乃裏はと息えん
 衣のへ十日をゆくまはらう
 旅まぬく旅おはせりー
 者らうやんきまやんえん
 毒の弁とけきくまはらうのあふ
 扇扇の陰葉白
 子乃ま
 知るるまやん
 うのくま乃絶
 旅り平

山家
 丹坡
 丸瓦
 子珊
 利半
 芭蕉
 末

う乃る若く昔毛乃るるの秋明六
知乃花中 抄ありやかつらみ
支考

歌一しん

棹乃歌たやうう涼一りどる舟
梨乃多紙他又蓮ある古長水
ううひきや竹の子教以老と修
芭蕉

郭云

字やうを二階よおらうはくま
けくまは一二の捨乃永峰家
引焼と月まおよせん月くま
挑打乃やうい詮をーおくあ
本よりぬく多獲んや 郭云
芭蕉

七十一

ううやああうーやう子紙
けうきくー風う物うなる
子親系のかさうれあ捨子ハ
利牛
丹波

小麦

柳子子多檢いやーヤ紙く
麦乃穂くたううくや筑波山
まきほの田掛やまいた質とホ
許六

公将乃藤りと川さうやうて通で

刈こみー小麦乃白のや青の肉
利牛

おあーけん

麦畑や出ぬけてもおまの甲
丹波
おあーけん

浦のやむくつ 罎のくまねを

盆水

四角年

五つ雨や傘小針のふ小人形

其角

さくぬきくみそやけつふ此の毛

大坂 西宮

昔よりくみそみそあつるあやめ

桃原

又もあぐりしるあし一線五把

炭原

みそめやまの骨より曹草

仙花

帳子のきくぬきあつる拾うか

左井

夏菰

並ねとみづのくつ門のほつき

目高

括はまよき魚あつる一足れま

新成

二三十番新をきくもあつる

舞町

くつ山力力吸ふぬあつるか
ナもく地やきくもあつるの白ひ

菰 菰 菰

いかに自由とくは飲り

五月雨

はくしれやとあつる入る丸生種

喜多

五つくるのきやとく川大和川

桃原

さみしれよ小針よきまの毛

丹波

五つとくよきまの毛

炭原

このかき桃原とくきく

五月あやきもまの毛

盆水

涼

川中の根まよきとくふ味か

菰

有影うつこく 反照や若菜光
涼しきく 蝶ふちけい 竹の枝
に 影をまのくま みるすいん 六
蔭風をすく けて 浄 一 八
まきしきとま ね 枯木の葉に
すし けや 霞 陽のまげこら
ひまき 美あまき 石のまひり
三月月の陰より すすむまき

歌一うす

橋やまき家の枕乃ありこころ
塵斗まきや 破草すく 一 七
此の中へい 貞留のく 一 七

あま 卯七
標之
卯月
八条
左木
飛坡
美雪

杉風
西秀
西景

ま乙女リ けい けい けい けい けい

光巻

十本ふるけい

山吹に 巴もまき 田植うね
ゆきうね やる 津い 一 七
なにくま やん けい けい けい けい
時のめまき まき まき まき 乃
るもの 乃 乃 乃 乃 乃 乃
まき 乃 乃 乃 乃 乃 乃
一 まき 乃 乃 乃 乃 乃 乃
あり 乃 乃 乃 乃 乃 乃
椿の 乃 乃 乃 乃 乃 乃
固責 乃 乃 乃 乃 乃 乃

新六
若月
小鏡
乙州
大州
仙花
牡丹
残香
井の有
忍凡

けりくふハ舞子ハ柳ヤ雲の峰
一校とすけりまふ所のみえか
竹のさや児のさきさきのさき
岩雪 仙花

さるべき人僕くゆをたむるを
我のまひて好やしむさるにあり
それよくまゝありきゆりか
名あるかありと先かありせぬ
くらと河をたき

弘く風よ名乃づくあつまは
あゝ人の別業よさるれ直事
つゆとくまゝの外のことなき
けりまをぬくみくみまな月
聖歌

極之部

各月

杖のまひれぬれりか
月をさくけりしこと多き

名りやふのそも居ぬあふさ
名りや極をさるる東の虚
名りやことことし和る月
名りや極をさるる東の虚
名りや生能揚り空をえ
名りや極のひくまらるる月
名りや極をさるる月
ひくまの伴の月をさるる月
其角 梨牛 西掌 里東

望峯ノ不盡筑波を

晴月や不二とさるる所
未就

七夕

笹の葉を枕身にやみしむ人
星を合ふよのえんを
七つのもやふりうらうらるるわさの川

其角

孤を

炭を

孟蒙盃

さうまうひうらうらうら
踊るさきをこころは舞てききの月
まきの月ねこつと門をうたふ

西堂

李由

井坂

朝良

深閑

朝良や夏は後あつた門の垣
朝良や日傭物さあはりの垣

世茂

利合

下しうらと朝良をらに柳は

淑春

秋虫

手しねをたのめらうとそきうら
悔いふ人のとまうねやきうら
端指しうらとさうらうら
さうらさうらや筆をて追やる猿の上

大津

碧月

夫中

おろ

孤を

鹿

な鹿の啼をこらうら
人のめをあらうら

車来

鹿のあむねやむの野垣敷

玉就

旅人のよみ

道に路やすうらうら

玉芳

草花

宮城野の 花やなほ 秋の花

桃隣

花やなほ ちかき 木守り

世を

序島の 花や刈り 摘みの時

猿錐

草乃野や 白根 揚るる

文中

あまえは けしき

芦の 花や 著る川 花 葉の 揺

去来

山中の 草花 ながさ

草花や 白根の 花ある 花うら

其角

園菊

菊畑の 花や ちかき 花の 花うら

秋風

秋菊も 花や ちかき 花の 花うら

桃隣

秋桂抽

樹の 花や ちかき 花の 花うら

利半

花の 花や ちかき 花の 花うら

祐甫

秋風や 花や ちかき 花の 花うら

木白

花の 花や ちかき 花の 花うら

孤屋

とらふし の 花や ちかき 花の 花うら

これら 花や ちかき 花の 花うら

未詳 花や ちかき 花の 花うら

あつらふ 花や ちかき 花の 花うら

めくあつらふ 花や ちかき 花の 花うら

うめを 花や ちかき 花の 花うら

天資 花や ちかき 花の 花うら

昔よりや石其のよのせしむく竹根
のそしつゝまあるはしは合んたれ
すうたちのこれとをけつるまうれ
やひつるれ二階のつまおりのひなを
このあるあつちやうみつを地盤乃
たうあきまをいへいおくおりのま
ろく整つて穀のままをいへいおく
てひんお様の是くろくまみまをいへ
た官を業乃とまをいへいおく
たてを穀乃とは紅糸乃をいへいおく
ま業の頂上をせりくくはとあま
お母のうてのゆをいへいおく

小業のころは一まをいへいおく
ひつるみのりしとをいへいおく
やうらまをいへいおく
くく此をいへいおく
おまをいへいおく
小業をいへいおく

石其とけり根とまやをいへいおく 地盤

野

お積りあつちやあつちのま
おのらるれおや業をいへいおく
礎のくろくまをいへいおく
おのらるれいへいおく

山
交
西
為

草花や花の華も見へぬ一息
夕日のけハ秋一色をさす
くろくろと風をうらうらとあうらうら
秋風一掃やあふあき他の上
虎丁乃片袖くりし月乃雲
冬之部
其角
七枝
依之

初冬

風中仲よりさむき山のまれ
巾中やまはるもさるる
お枯乃ぬえとくぬえさるる
襦中や氣流まらぬさるる
松の葉乃きかぬさるる
其角
桃隈
巴麓
支梁
射辰

刈草もまじりぬのちあふ存
風此葉もよとくまはるる
初中や中 猫乃毛もまはるる
風中 猫乃面
西
八又水
桐実
妙香
桃舟
八又水

亦枯れ根もまらぬ竹皮
常月よまれの獲後乃まらぬ
桃隈
遊刀

時雨

芋食乃後くらくらく初
思くらく油の用もれり
芭蕉の海とわらわらふ
ゆめありくめりし
科辰

七の角とあはれなむく

評六

落ぬのころ

小坂手前とありの向を扱きとぬ

世故

大根行とらふと

舞臺子小坊とあるや大根引

芭蕉

津まきとらふとありと大根引

世故

井邊とあるとありの古大根

酒堂

はむささぎとありとありと

人々の手前とありとありと

北坡

この山を先接取しとありと

示蜂

葛まきとありとありとありと

刊年

長めくもきく

我眉

奥店や 蒸らち上を乃月

里末

大の二とある川の

他国よりのは乃とありとありと

今もまよや

雪

ちりきりともありとありと

世故

初をこれとありとありと

利牛

そのまきや 堀の山明のまきと

買山

雪の山とありとありと

依く

雪乃日やとありとありと

枝鉏

雪の取ぬるまで

杉のくまを継ぐ木の花
朱此鞍や佐母くわりのまはれ
たつまやせんきふりくはく
炭賣此撲町さるるまはれ
油山乃もるるまはれ
白の舟や曲突まはるるまはれ

歌あま

かみーされ狗よおこ込枯舟
まらまら糖のころ白の端
禪門乃草屋袋おろし十
市や積みの益拍まら村
白魚のまらま白ひや杉の笑

楳の火やあらしき方此
庚申やこころの火燈乃
後と後と縁のつらき
海へ降る雪や中不波の
すーたき
煤くまを已り棚つた大
燐拂せしきくは代
蘇つる中元娘さるる
山外のふりくまはれ
待まら氷まら
あまら
あまら

夫甲 梅香 其角 全 芭蕉 万中 舟坡 嵐香 誓月 杉風

ともうすめ舞入もあり舞止る
 赤子由
 一羽のさき一羽のさき
 孤を
 獨あつ乃けをく一も二年の暮
 横能
 一の羽をさき一も二年の暮
 世世
 海乃れれあふるさき世世
 世世よりあふるこれ乃り

いづれもあふるこれ乃り

孤をくさき一も二年の暮
 素就

一も二年の暮とあふるこれ乃り
 淑更

誦諧秋之部

秋乃垂尾上の杉は新れり
 七角
 おくれく一羽はりて秋の暮
 孤を
 秋の暮は日俯あふる貝吹く
 全
 肉の厚くはる麻乃門
 其角
 秋乃垂尾上の杉は新れり
 全
 了るはるや丸をころも
 孤を
 下るはるは乃葉松さす
 全
 坊乃乃さるは葉ハかき
 其角
 是れはるさき一も二年の暮
 孤を
 息吹くはるは葉ハかき
 其角
 田乃畔は子苗把と抱る
 孤を
 及るはるはるは葉ハかき
 其角

以惣乃引咎一とんをいれ
 其角 孤屋
 鈴繩子籠のさうれ八のりく
 孤屋
 厚北下い後あつた
 其角
 要之乃梅津桂乃花を
 其角
 むくの子ありしをのちを
 其角
 のさんおあき令おつひ乃
 孤屋
 又乃端のあきき肉
 其角
 友草おあさるはちり
 孤屋
 あぶととのん小借のや
 其角
 年のそを耕乃核もちりて
 其角
 常とさあらし風合と手
 孤屋

一君これえこりれ次書乃お
 其角
 祥と落の片居つる築
 孤屋
 幸濟く雀のこりる 秋乃れ
 其角
 水より 吟泉 有乃雪の
 孤屋
 残宿くく 宿くまゝの
 其角
 上筆あるく 法くおく
 孤屋
 小葉 落む 行言の せ
 其角
 ちりるくく 宿 希乃り
 孤屋

孤屋縁まの 叶ちて後
 其角
 今より 赤清の ちり
 其角
 其角 孤屋 五十五

天竺の母

桃陵

及んばり松ひあらびし書中のか
 らんこゝの落る秋 風
 入内ふおとあ人のこと并明く
 峰の弁さく相乃ひらふ
 相盡るふあゆめさくへつさく
 つまの傍るる 風のつらやむ
 風のさきこゝあつくさく
 近くはあゆめさくへつさく
 さくへつさくさくへつさく
 さくへつさく十月乃おくら
 雲雨りしあゆめさくへつさく

桃陵
 利牛
 桃陵
 桃陵
 利牛
 利牛
 桃陵
 桃陵

今又あらしを娘乃仕合
 せんあらしとあらしはあらし
 洗おたらしをさくへつさく
 付あらしはあらしをさくへつさく
 鴨さらしはあらしをさくへつさく
 人のお負のあらしをさくへつさく
 さくへつさくさくへつさく
 さくへつさくさくへつさく
 さくへつさくさくへつさく
 さくへつさくさくへつさく
 さくへつさくさくへつさく
 さくへつさくさくへつさく

利牛
 桃陵
 桃陵
 利牛
 利牛
 利牛
 利牛
 利牛
 利牛

杉の本あり一舟にゆて
 けしりる志のや一乃ありて
 ちりちりかかて又せおどをよは
 下へやうんいよとをてりて
 ちりちりしんしんをあてめり商
 物も二肩よりくらぬ肩よりて
 糸と 惣別 家の上 糸 入
 名 焼物と社会とる 畠田 菊
 花と望しんく今もち種をく
 ちりちりて 雲 踏とくすの 志 事 事 事
 先 仲 ちりちり ちりちり 入 舟
 内てより 暮れ ちりちり ちりちり の 日

利牛

桃原

世故

利牛

桃原

世故

利牛

桃原

世故

利牛

桃原

ちりちり ちりちり ちりちり ちりちり

世故

ねき内なる ねき川を ねき
 ねき美の ねき河を ねき美の ねき
 ねきてハヤしと ねき時を ねき朝
 ねき色 ねき ねき乃小節を ねき
 ねきしちりちり ねき乃ちりちり ねき
 ねき乃乃 ねきと ねき乃乃 ねき乃乃
 ねき乃乃 ねき乃乃 ねき乃乃 ねき乃乃
 ねき乃乃 ねき乃乃 ねき乃乃 ねき乃乃
 ねき乃乃 ねき乃乃 ねき乃乃 ねき乃乃
 ねき乃乃 ねき乃乃 ねき乃乃 ねき乃乃

世故

世故

利牛

桃原

世故

利牛

桃原

世故

淡苑乃雪より 翁後もやぬ
 内志の玉舞 桃折と吹けしそ
 疾 舞のたる。湯の膏菜
 上とまき大干 草刻むる人のそ
 るよゆぬ日と内と意字の
 泊 妻此七ツけつるをまつや
 媛子門ある。西平石 九
 け 浄氏 餘息もよと指有と純
 所子 嚙此うつるま 草
 新 留乃 米糞もあつてく 實其上
 吹くくれくる。草くくくくあり
 川 裁乃 草一のよをあらうり

世夜 利半 孤屋 世夜 草菜 孤屋 利半 世夜 世夜 利半 世夜 世夜 利半 世夜

平地の寺けくまき 菖 地
 干 おと日向乃 夏くまき せそ
 地 出ん 野此 菖 而くま 葉
 義 則子 信 存とまき なる 草
 又 河 信 多 一 午 ち 草 草
 ころくくくく 大 海も 四のり
 せくくくく 此のむ 状乃 改さき
 草 かくて 債 事 令の 借りお
 草 草とくくく 存 せぬよ 肉
 風 やくく 秋乃 時 の 辰さく
 鯉 此 写 字乃 認とひま
 ち けくく 葉の 揚 場のみ 疾り

草菜 利半 孤屋 世夜 草菜 孤屋 利半 世夜 世夜 利半 世夜 世夜 利半 世夜

月と雲とらうのうれあ移らま
こころもも茶乃三内中付
彌炭地ちうとをさうまうの風

地波 孤石 利牛

世甚 母波 孤石
利牛 各九句

雷の雲おまはらみまえ尚を
日の出のやうくの赤さるる
下 青と一舟淡く赤の
あつとくまうり大活の候
身ふあつと風もふく落月お
粟とくくぬくひらき畠地

利牛 桃浪 子珊 芭蕉 孤屋 松風

八十四

雲の雲おまはらみまえ尚を
日の出のやうくの赤さるる
下 青と一舟淡く赤の
あつとくまうり大活の候
身ふあつと風もふく落月お
粟とくくぬくひらき畠地

世甚 母波 孤石 利牛 各九句

杉風 杉風
 徳水 徳水
 孤石 孤石
 芳良 芳良
 桃院 桃院
 信く 信く
 占圓 占圓
 子冊 子冊
 利牛 利牛
 杉風 杉風
 利合 利合
 地坡 地坡

子冊 子冊
 利牛 利牛
 杉風 杉風
 利合 利合
 地坡 地坡
 杉風 杉風
 徳水 徳水
 孤石 孤石
 芳良 芳良
 桃院 桃院
 信く 信く
 占圓 占圓
 子冊 子冊
 利牛 利牛
 杉風 杉風
 利合 利合
 地坡 地坡

